

人間と看護

小澤 道子

はじめに

立教大学と本学（聖路加看護大学）との単位互換制度が、2001年4月より開始され、本学学生は、立教大学の全学共通カリキュラムの科目を受講し始めました。2002年度からは本学教員が立教大学の全学共通カリキュラムの科目を担当することになりました。

受講した初日の本学学生は、立教の広いキャンパスと、食堂のメニューが豊富で、しかも値段も安いことを羨ましそうに話していました。

リベラル・アーツが重要視されていることは本学でも同様ですが、今回改めて、立教大学のカリキュラム改革への取り組みとエネルギーに敬意を抱きました。特に、全カリのシラバスには、多様で魅力的な科目とその内容が示されており、学生の探求心が刺激されるだけでなく、学問の自由が保証されていることが窺われます。

私どもの大学は、創立82年目を迎える単科の看護大学であり、入学時から将来看護師・保健師・助産師としての看護専門職者として成長することの

目的が明瞭であります。全校生は、約300人、専任教員約50人という、6階建て1棟の小さな大学です。2年前より男性が入学するようになり共学校となりました。

この度の総合大学と単科大学間での単位互換制度は、個々の学生の興味や関心に合わせ、開かれた学問が学習できる環境の提供として有用なことだと喜んでいます。特に、立教大学と本学は、同じキリスト教の聖公会に建学の基盤をもち、また、本学校地に、立教学院発祥の記念碑があるなど、広い意味では、社会における大学存在の意義を共有する近い関係にあると思います。

本稿では、今年、後期に開講した「人間と看護」を始めるにあたっての私どもの思いと、受講学生の様相などをご紹介します。

開講にあたって

開講にあたって、私どもは、少しの心配と多くの期待がありました。それらは、次のようなことです。いつも看護を志向する学生と接していますの

で、総合大学の様々な専攻の学生に、どのように看護を伝えていくとよいのか？看護の内容は伝わるのであろうか？でも、専門の違う学生に自分の専門の魅力を伝えていくことは楽しみである。だとすると、各々の専門領域で最も得意、最も伝えたいもの、最も知って欲しい内容にしたらどうか。何よりも、将来様々な社会の領域で活躍を期待されているたくさんの元気な大学生に接することは楽しいことであり、その中で、学生が、看護をどのように思い、考えているのかを知ることができ、国民の健康を守りたい看護・看護学の日常性への有効な刺激が得られる機会と期待できる…などです。

内容に関しては、教員3人のワーキンググループで話し合いながらすすめました。

まず、講義のキーワードとして、本学の看護の概念「人間の健康に焦点を当て、人間と環境に働きかけ、各人の到達しうる身体的側面と心理・社会・霊的側面の最高位、すなわち最適健康状態を生み出すように援助する働き」から、「人間」・「健康」・「看護」としました。そして、キーワードに生涯（ライフサイクル）を視野に入れて行くことになり、生老病死をキーワードに加えました。その背景を少し説明いたします。

日本は、人生80年時代を迎え、世界でも有数の長寿国ですが、人々は、長く生きることを喜んでいるでしょう

か？人間の一生は、人によって様々ですが、強いことも弱いことも善も悪も含んだ人生の軌跡全体を含めれば、健康についての意識にも変化がもたらされます。人間は、生まれてから死に向かって生活を続けていきますが、どの時期においても、どの瞬間においても病気や障害そして死という現象が起こります。従って、生き続けるなかに、病気や障害、そして死が隣り合わせになっていたり、避けることができない事実を理解していくことも求められています。現在では、無病息災ではなく、一つくらいの病気をもつ一病息災が世の常とさえなっています。そして、病気や障害をもちながら安定して、心豊かで広がりのある人生を過ごしたいという願いと希望をもちます。病気の症状や障害の状態を抱え、自分に与えられた荷を背負い、病気や障害を持った自分を受け入れ、自分らしくいきいきと生活していくことが課題であります。言い換えれば、《どうよく生き、どうよく老い、どうよく病み、どうよく死ぬか》といえます。そこでキーワードを生老病死にしました。学生が、現在を過去の結果としてみるのではなく未来への準備としながら生涯を通して自分の健康を自分で守ることの大事さに気づいてほしいと願います。

科目名は、全カリ担当の先生ともご相談して、「人間と看護」と決め、タイトルを「看護学から見る生老病死」としました。講義担当は、各専門領域

(小児看護学・成人看護学・老年看護学・母性看護学・精神看護学・地域看護学・基礎看護学・看護管理学)の教授が毎回交代で行い、成績評価は、レポートと出席状況にしました。

科目のねらいと講義内容

科目のねらいとテーマをシラバスに次のように載せました。

[ねらい] :

人の「からだ」と「こころ」の健康は、どのようにしたらより良く保たれ、生活しやすくなるのであろうか。また、人が「生・老・病・死」の状況にある時には、どのようにしたら気持ちの良い生活を過ごせるのであろうか。これらの問いに対して、看護学はどのような答えを出そうとしているのかを各々の専門領域の立場から、現在を見据えつつ、将来展望を含めて概説をしていきたい。学習者が生涯にわたり、「自分の健康を自分で守る」力と手がかりを学んでほしい。

[テーマ] :

- 第 1 回：看護学と健康
- 第 2 回：看護における技術
- 第 3 回：精神保健と精神を病む人への看護
- 第 4 回：子どもの誕生に関わる家族への援助
- 第 5 回：子どもの健康問題と看護
- 第 6 回：大人の健康問題と看護

第 7 回：人の死と看護

第 8 回：老いて病む人への看護

第 9 回：在宅での生活を支える看護

第 10 回：看護職者の役割

第 11 回：これからの看護・看護学
(まとめ)

学生の科目選択の理由

第 1 回目に、学生に「科目選択の理由と期待」の記述を出席票をかねて求めました。表 (P.122) は、自由記述された科目選択の理由内容を分析して類型化したものです。第 1 位は、「看護・看護学に興味や関心がある：49.4%」、第 2 位「健康に興味や関心がある：19.3%」、第 3 位「人間を知りたい：12.6%」であり、第 1 位から 3 位までで全体の 8 割を占めていました。そのほか「看護と介護のかかわりや違いに興味がある」、「科目名：『人間と看護』にひかれた」、「シラバス内容の生老病死の言葉にひかれた」などが続き、その他としては、なんとなく・成績が出席とレポートのみなどが 4.8%でした。全体的に、学生個々が明確に学びたい動機と学びたい焦点をもって臨んでいることが知らされました。さらに、その内容は、二つに分かれていました。一つは、第 1 位の看護・看護学に興味や関心があるに含まれているもので、「祖父母や父母・友人そして自分が病気や障害になった時に看護の知識や接し方、さらに看護の仕方を身につけたい」・「入院や通院している患

者の立場ではなく、看護する立場の現実の話を知りたい」・「ターミナルケアの仕方」・「医療の問題を看護から知りたい」などの具体的で実践的な内容であり、もうひとつは、「健康とは何か」・「健康に生きるとは何か」、 「人間とは何か」・「人間の生きる

力・生きようとする力とは何か」などを知りたいという内容であり、学生が、自分らしさを探し、自分の生き方を求めて答えのない永遠の問いとつき合い続けていく姿が読み取れました。

表 科目選択の理由

理由内容	件数 (%)
看護・看護学に興味・関心がある	82 (49.4)
家族（祖父・祖母・父・母）、友人、私の病気や障害者へ看護の知識や接し方・仕方を身につけたい	29
看護学に興味・関心を持っていた	15
入院体験・通院していて看護を知りたい	13
高齢化社会・老人の看護に興味	10
精神保健・ターミナルケア・在宅ケアに興味・関心	8
子供の誕生・子供の看護に興味	4
医療の問題を看護から知りたい	3
健康に興味・関心がある	32 (19.3)
健康とは何か・真に健康とは・心と体の健康・からだの健康・健康に生きるとは・自分の健康のために…など	
人間を知りたい	21 (12.6)
人間とは何か・人間はどう生きるか・人間の生きる力・人間への興味・人間の生きようとする力…など	
看護と介護（福祉）のかかわりや違いに興味	14 (8.4)
科目名「人間と看護」にひかれた	5 (3.0)
シラバス内容「生老病死」にひかれた	4 (2.4)
その他	8 (4.8)
なんとなく 成績が出席とレポートのみ 時間が都合よい	
計	166 (100)

講義の状況

第1回の講義は、どの位の学生が履修するのか予測がつかず、月曜日の1限でもあり、100部資料印刷があれば十分とみたてて講義開始時間ぴったりに教室8201に入りました。教室に入ってまず驚いたことは、100人以上が座って待っていたことでした。講義途中に入りがなく、もちろん私語もなく学習姿勢の良さを感じました。その日の出席は、166人であり、後に送られてきた履修者名簿は215人でした。

私は、通常、1番多くて90人のクラスであり、遅刻者や講義中の出入りなどを経験しているものですから、学習態度の良さを感じて、担当の事務の方にお伝えしました。すると「最近の学生は真面目になってきています。特に1時限目を選択し、看護を学びたい学生は真面目なのでしょう。」とすまして述べられていました。その後、講義回数をすすめていく中で、本学で経験している程度の遅刻・講義中の出入り・私語などもでてきていますが、熱心に聴いているとも聞いております。大教室であり、時間中に質問や意見を述べる学生は少ないですが、終了後に個人的質問に来る学生がいるとも聞いています。

おわりに

まだ、講義が途上であり、学生側がこの科目をどのように受け止め、評価

しているかなどの学生の反応が、今後楽しみです。学生の反応によってどのようなメッセージに重点を置いていくかを検討していきたいと思っています。

今回、専門領域の講師が毎回交代する方法をとっていますが、専門領域がその専門性の知識を提供するときには、講義の受け手である学生自身が自分の責任において統合的視野に立ってそれらの知識を整理したり、理解することが託されていますので、この点がどうなっているのかが気になる所です。

おざわ みちこ

(2002年度全カリ非常勤講師、
聖路加看護大学教授)